

米と日本文化

佐原 真

-
- | | |
|---------|-----------------|
| はじめに | 2. 弥生米と堅果 |
| 1. 縄紋の米 | 3. 本土文化における米の評価 |
-

論文要旨

日本人は、前3-後8世紀にガラスを加工したのに、それを忘れ、16世紀以降、再びその技術を知った。初期のガラスは「消えた先駆け」である。一部の日本人は、16世紀以来、茶を飲んでいて、これが大きくひろまったのは、この100年間のことである。初期の喫茶は「小さな先駆け」である。

縄紋土器そのものの土の中にイネの葉の化石（プラント＝オパール）が含まれていることから、炭素14年代で3,500あるいは4,500年前に、縄紋人がイネを栽培していたことは確実にされた。

しかし、縄紋人が基本的に食料採集民であったこと、本州・四国・九州で堅果を主食としたことは動かない。縄紋米は、「消えた先駆け」か「小さな先駆け」に違いない。

佐賀県菜畑、および福岡県板付の下層の水田あと、福岡県曲り田および那珂でみいだされた村あとの時期を弥生文化最古の段階ととらえたい。

この最古の弥生文化以来、農耕社会は成立し、人口は増大し、村の数はふえ規模は大きくなり、有力者と政治的まとまりとが出現し、集団と集団とがぶつかって大量の人を殺す、という意味での戦争が始まった。そして、六、七百年で前方後円墳が生まれた。弥生時代の米の生産量を少なくみつもる考えもある。しかし、今のべた現象は、十分な米なしにはありえない。

弥生時代以来、米が主食であり、14・15世紀以来、米とアワ・キビが主食となり、農民は米を売りアワ・キビを食べた、とする小山修三・五島淑子の説を重視する私は、民俗学・日本中世史の日本文化における米の評価を中世以来の事実にもとづくもの、とみたい。また、稲作にとって不利な環境下にある岐阜県北部の19世紀の数値を現代のアジアの諸米食民族の数値と比較した結果にもとづいて、日本人（本土の人びと）＝米食民族ととらえる石毛直道の考えに賛同する。